

# 学校教育に対する保護者の期待と満足 学校段階に着目して

佐藤 香（東京大学）

小学校と中学校とでは、学校教育に対する保護者の期待の構造が異なっている。中学校よりも小学校の保護者のほうが多様な期待をもつ傾向があり、逆に、中学校の保護者は焦点を絞った期待をもつ傾向にある。また、公立の小学校の保護者は基礎的な学力と受験学力とを明確に区別して認識している。

満足度については、全般的に中学校よりも小学校の保護者で満足度が高い傾向が認められた。中学校の保護者では、とくに学力にかかわる満足度が低い点が指摘される。ただし、中学校では、満足度の高い保護者は学校のどの側面でも満足しているとみることができる。

学校教育に対する満足度は、全般的には期待が高いほど高い。保護者の満足度を高めるためには、まず期待をもってもらう必要があると考えられる。

## 1 背景と目的

学校をめぐる近年の社会的問題の1つとして、保護者の学校への対応や意識が着目されている。この問題は、端的には「クレーマー（保護者クレーム）」や「モンスターペアレント」と呼ばれる保護者の存在として語られることが多い。

嶋崎（2008）によれば、学校に対する保護者のクレーム問題が増加したのは1990年代半ば以降で、とくに2000年代半ばからは困難な事例が全国的に急増しているという。小野田（2006、2007）は、こうした傾向の背景として「教育改革」の影響をあげている。一連の教育改革によって、学校は「商品としての教育」の質の向上を求められ、バウチャー制や学校選択制という形で変革を迫られるようになってきている。この風潮が学校教育を「消費する対象」としてとらえ、学校に対する要求を拡大させ続ける保護者を増

加させているという。広田・角（2008）では、「モンスターペアレント」の意識として、「お客様」意識、「納税者」意識、「弱者」「被害者」意識、義憤、の4つをあげている。小野田のいう「商品としての教育」と、広田・角のいう「お客様」意識や「納税者」意識とには、通ずるものがある。

確かに、「モンスターペアレント」と呼ばれるような保護者は、その対応を余儀なくされている教員の心身を疲弊させ、教育現場を混乱させているに違いない。その意味では、きわめて喫緊の課題といえよう。けれども、これらの保護者は一部の限られた人々であり、大多数の保護者は「クレーマー」でも「モンスター」でもないという事実を忘れてはならない。ただし、うえてみた小野田と広田・角による共通点は重要である。「クレーマー」でも「モンスター」でもないとしても、教育改革が進展するなかで、多

くの保護者が「商品としての教育」の質の向上を求め、「お客様」意識や「納税者」意識をもっていると考えられるからである。

黒崎（1994）は、私立中学受験ブームと関連して、伝統的な規範にもとづく公立学校制度のありかたが「学校に対する親と子どもの期待と関係者の努力との間にズレ違いを引き起こし」、それが保護者の公立学校への不信、ひいては私学ブームに結びついているのではないかという問題提起をおこなっている。ここで指摘された公立学校制度の伝統的な規範は、その是非は問わないにしても、その後の教育改革のなかで相当程度まで緩和されたといえるだろう。つまり、学校に対する親と子どもの期待に応えることが、従来の学校よりも容易になっているはずである。そうであるとすれば、現在の学校にとって、親の期待すなわちニーズを、いかに正確に把握するかということが、最も重要な課題となるだろう<sup>(1)</sup>。

学校に対する保護者のニーズを把握することが重要だという認識は、たとえば、2004年にベネッセ未来教育センターと朝日新聞社が共同で実施した「学校教育に対する保護者の意識調査」にもみることができる。今回、私たちが共同研究を行った「学校教育に対する保護者の意識調査2008」も、この延長線上にある。

学校に対する保護者の意識は、一般に、保護者の性別、学歴など学校経験、経済的ゆとり、子どもの数など、属性的要因によって異なることが知られている。山下・岡田（2007）はこの点に着目し、「学校教育に対する保護者の意識調査」（2004）のデータをもちいてクラスター分析によるターゲット・プロファイリングをおこなっている。具体的には、東京都区部在住の小学校2年生の子どもの母親、116名の保護者を対象として、4タイプ——「非干渉型ヤングママ」「心配性キャリアママ」「子育てビギナー教育ママ」「生活切迫型パートママ」——の保護者像を抽出し、とくに「生活切迫型パートママ」で教

師に対する信頼度が低いことを示唆している。

以上をふまえ、本章では、学校教育に対する保護者の期待と満足度に焦点をあてて、それが小学校と中学校とでどのように異なるのか、期待と満足度との関係はどうなっているのかについて検討をおこなう。

## 2 期待の構造

### 2.1 小学校と中学校とで異なる期待

調査では「学校にどのような教育や指導を期待しますか」とたずね、21の項目について「とても期待する」「まあ期待する」「あまり期待しない」「まったく期待しない」の4段階で回答してもらっている。図1-1は「とても期待する」「まあ期待する」の合計値を、学校段階別に示したものである。

ここでは、小学生の保護者が期待する数値が高い順に項目を並べてある。上から11項目（「教科の基礎的な学力を伸ばす」から「自然体験の機会を与える」まで）は、中学生よりも小学生の保護者の期待のほうが高い。また「郷土や国を愛する心を育てる」「音楽・美術など芸術面での才能を伸ばす」の2項目も同様である。逆に、小学生よりも中学生の保護者の期待のほうが高いのは、「学力や能力を客観的に評価する」と、「ボランティアを体験させる」から下の7項目（「音楽・美術など芸術面での才能を伸ばす」を除く）となっている。

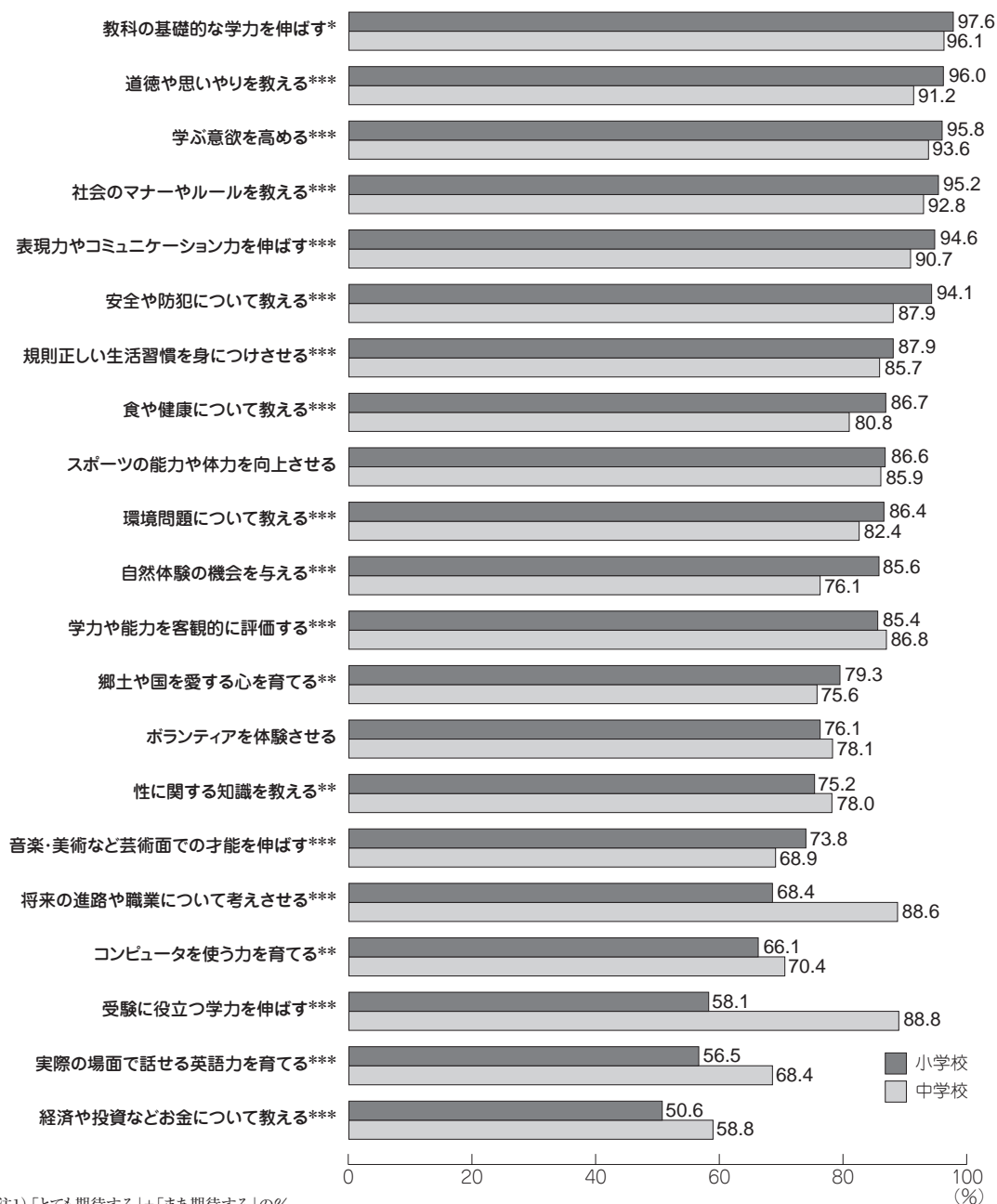
なお、学校段階と回答の分布との関連性について、 $\chi^2$ 乗検定による有意水準を項目の最後に示してある。ほとんどの項目で有意な関連性がみられるが、「スポーツの能力や体力を向上させる」「ボランティアを体験させる」の2項目では有意な関連性が認められない。

おおまかな傾向としては、小学生の保護者は基礎的な学力と、子どもを取り巻く社会的・自然的な環境について理解させることを期待しているといえるだろう。中学生の保護者が、それ

を望んでいないわけではないが、それらに対する期待はやや薄れ、将来の進路や職業について考えさせたり、受験に役立つ学力を伸ばしたりすることを、より重視するようになるようである。子どもの発達段階、すなわち、子どもが自

分の環境を理解し、それをふまえて、その環境のなかでどのように生きていくかを学び、選択していくプロセスに対応して、保護者の期待が形成されていることがわかる。

図1-1 学校に対する保護者の期待



注1) 「とても期待する」+「まあ期待する」の%。  
 注2) \*p.<0.5 \*\*p.<0.1 \*\*\*p.<0.01

## 2.2 因子分析による期待のパターン

前項でみたように、小学校と中学校とでは学校に対する保護者の期待は異なる。ここでは、因子分析をもちいることによって、期待にかんする項目を整理して、そのパターンを描き出すことにしたい。

期待にかんする21項目のうち、分布が極端に偏っていたり他の項目との相関が非常に高かったりするなどのために因子分析には適当でない9項目を除外して、因子分析をおこなった結果を表1-1に示した。小学校の保護者では4つの因子、中学校の保護者では3つの因子が抽出された。図1-1で上位であった項目が第3あるいは第4因子となっているのは、大多数の保護者が期待しているために回答の散らばりが小さく、分類のための情報としては、他の項目よりも効果的ではないためである。

抽出された因子がどのような意味をもつのかについて、表1-1とあわせながら、学校段階別にみていくことにしよう。

小学校の第1因子は、ボランティア体験・自然体験・環境問題・食や健康の4項目と強く関係している。したがって、この因子は、学校や家庭の外の世界について体験したり考えたりする、いわば「生きる力」についての期待という

ことができる。第2因子は、道徳や思いやり・社会のマナーやルール・規則正しい生活習慣と関係している。基本的な「社会性」を身につけさせてほしいという期待である。第3因子は、受験に役立つ学力・コンピュータ・英語の3項目との関連性が高い。小学生の誰もが必要というわけではないが、必要な子どもは身につければよいし、その機会があれば悪くはない「準・学力」を意味すると考えられる。それに対して第4因子は、基礎的な学力・学ぶ意欲の2項目と強い関係がある。この第4因子は、小学生の親であればほとんど誰もが学校に期待している「学力」と考えることができる。

ここで注意しておきたい点が2点ある。第一は、基礎的な学力と学ぶ意欲とがセットで期待されている点である。第二は、小学校の保護者が、基礎的な学力と受験に役立つ学力とを、はっきり区別して認識している点である。この点は、小学校の保護者と中学校の保護者とでは明らかに異なっている。公立小学校では、受験に役立つ学力を求める保護者が部分的であることと関係していると考えられる。

中学校の第1因子は、小学校の第1因子に加えて、コンピュータ・英語との関連性がみられる。小学校では「準・学力」と認識されていた

表1-1 期待の因子分析

	小学校				中学校		
	1	2	3	4	1	2	3
教科の基礎的な学力を伸ばす	0.148	0.117	0.136	0.864	0.104	0.223	0.815
受験に役立つ学力を伸ばす	-0.071	0.091	0.754	0.286	0.189	0.120	0.797
学ぶ意欲を高める	0.216	0.223	0.152	0.811	0.171	0.325	0.774
道徳や思いやりを教える	0.301	0.705	0.048	0.372	0.226	0.798	0.303
社会のマナーやルールを教える	0.255	0.815	0.108	0.257	0.213	0.847	0.250
規則正しい生活習慣を身につけさせる	0.145	0.813	0.214	-0.025	0.308	0.717	0.126
コンピュータを使う力を育てる	0.310	0.170	0.749	-0.005	0.676	0.034	0.335
実際の場面で話せる英語力を育てる	0.344	0.111	0.755	0.081	0.645	0.063	0.462
ボランティアを体験させる	0.791	0.121	0.247	0.112	0.756	0.312	0.037
自然体験の機会を与える	0.825	0.183	0.132	0.120	0.806	0.288	0.032
環境問題について教える	0.804	0.169	0.106	0.180	0.710	0.346	0.151
食や健康について教える	0.632	0.327	0.117	0.128	0.552	0.441	0.174
因子寄与	5.026	1.315	1.266	1.008	5.623	1.453	1.080
因子寄与率 (%)	41.884	10.958	10.552	8.398	46.862	12.112	8.997

注) 因子抽出法：主成分法 回転法：Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

コンピュータや実践的な英語を含めて「生きる力」と認識されているのかもしれない。第2因子は小学校と同じ3項目との関連性を示す「社会性」である。第3因子は、受験学力も含めた「学力」である。

## 2.3 期待のありかた

ここでは、学校に対する保護者の期待がピンポイントであるのか、それとも複数の期待をもっているのかを中心として、みていくことにする。各因子の得点の大きさで、保護者を「期待大」「期待小」の2つのグループに分けた。2つのグループは、それぞれの因子について、ほぼ半数ずつとなっている。

まず「期待大」の数からみていこう。小学校では、「期待大」が1つもない保護者は6.5%、1つが22.9%、2つが31.2%、3つが28.1%、4つが11.3%である。2つまたは3つの期待が大きい保護者は過半数となり、4つの因子すべてを期待している保護者は1割程度にすぎない。

他方、中学校では「期待大」が1つもない保護者は11.1%、1つが35.2%、2つが38.1%、3つが15.5%で、「期待大」が1つもない保護者が小学校よりも多くなっている。また、3つの因子すべてが「期待大」である保護者は小学校よりもやや多いものの1割を超える程度で、1つまたは2つの期待が大きい保護者が7割強と大多数を占める。

「期待大」の内容もあわせて、その分布をみたのが、図1-2および図1-3である。順にみていこう。

組み合わせのパターンから見ると、実は、小学校では4つすべてが「期待大」である保護者が最も多い。次いで、「社会性」「準・学力」「学力」の3つ、「生きる力」「社会性」「学力」の3つ、「社会性」「学力」の2つ、「準・学力」のみ、「生きる力」「学力」の2つ、「準・学力」「学力」の2つ、などとなっている。また、ピンポイント、すなわち「期待大」が1つのみの場合は、「準・学力」

が最も高い点も興味深い。

それに対して、中学校では、僅差ではあるが3つすべてのパターンよりも「生きる力」「学力」の2つが最も多くなっている。これら2つのパターンに次いで「生きる力」のみのピンポイント型の期待が多い。「学力」のみのピンポイント、「社会性」「学力」の2つが、これらのパターンに続く。中学校でも「学力」のみが期待されているわけではなく、「生きる力」を期待する保護者が多い点は着目に値する。ただし、小学校の保護者と比較すると、「社会性」に対する期待が薄れているようである。このこととも関連して、中学校の保護者のほうが、より焦点を絞った期待をもっているとみることができるといえる。子どもが中学生になると、学校にすべてを期待することは難しいと感じるようになるのだろうか。

なお、「期待大」の数を従属変数、両親の年齢・学歴・子どもの性別・子ども数・子どもの成績・経済的ゆとり・地域などを説明変数とする回帰分析をおこなったところ、小学校でも中学校でも、どのようなモデルも成立しなかった<sup>②</sup>。これは、保護者の期待のありかたが、上記のような属性的な要因では説明できないことを意味する。どのような保護者がどのような期待をもつのかを推測することは難しい。したがって、学校や教員が保護者の期待を知ろうとするならば、個々の保護者の意見をきめ細かに聞くしかない。この点は、十分に認識しておく必要があるだろう。

## 3 満足度の構造

### 3.1 中学校で低い満足度

前節では学校に対する保護者の期待のありかたをみたが、本節では満足度についてみていく。調査でたずねている満足度にかんする項目は、残念ながら、期待にかんする項目とは一致しないが、満足度にかんする16項目について「とても満足している」「まあ満足している」と回答した



図1-2 小学校の保護者の期待パターン

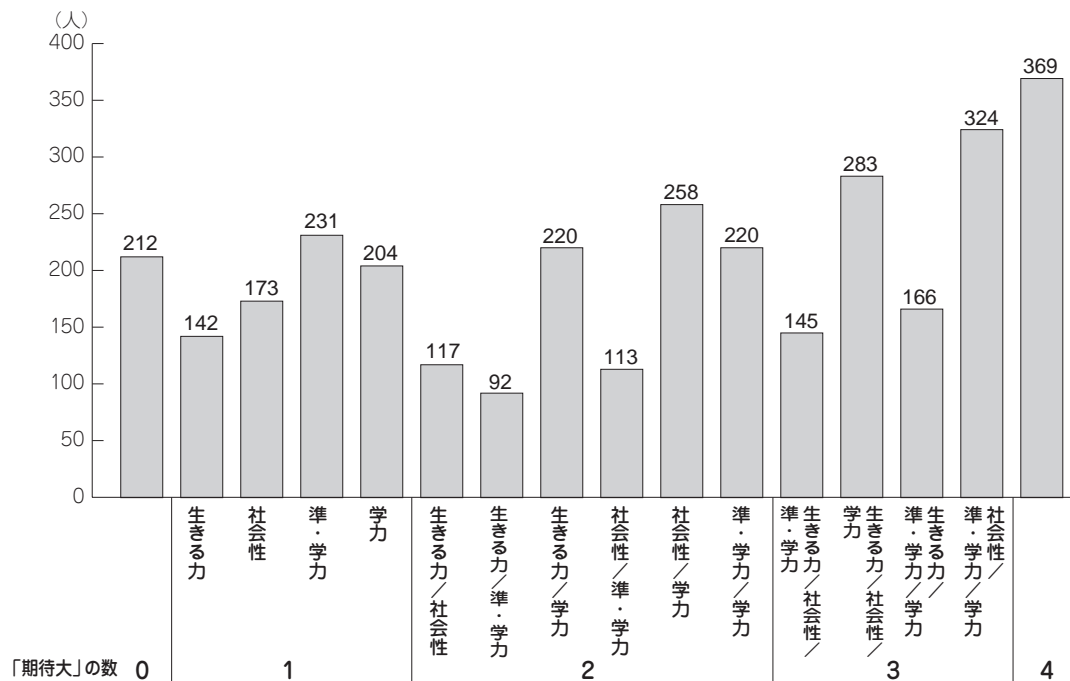
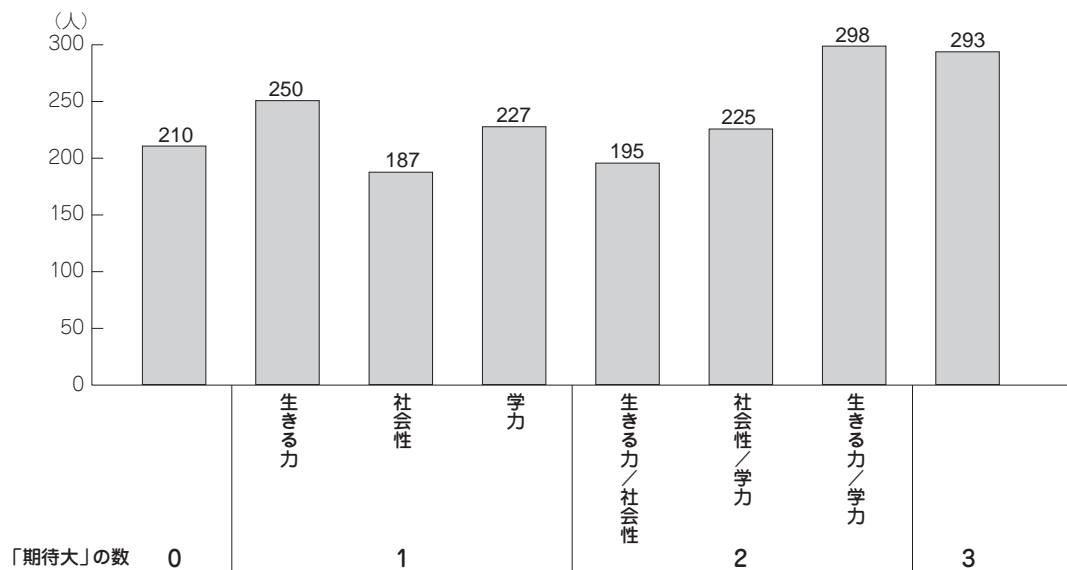


図1-3 中学校の保護者の期待パターン



合計比率を図1-4に示した。

16項目のうち、「放課後のクラブ活動や部活動」「将来の進路や職業について考えさせること」「『総合的な学習の時間』の指導」の3項目以外は、いずれも中学校より小学校で満足度が高くなっている。 $\chi^2$ 乗検定によると、「運動会

などのスポーツ活動」と「学芸会や音楽会などの文化活動」の2項目では、小中学校による違いはそれほど大きくはないが、他の項目では、はっきりと異なるという結果になっている。

小学校では、「将来の進路や職業について考えさせること」「『総合的な学習の時間』の指導」

の2項目で、「とても満足している」「まあ満足している」の合計比率が50%を下回っている。また「学校の教育方針や指導状況を保護者に伝えること」「学ぶ意欲を高めること」「学校の施設や設備」「放課後のクラブ活動や部活動」の4項目では60%台にとどまっている。これらの点において改善の余地があるといえるだろう。

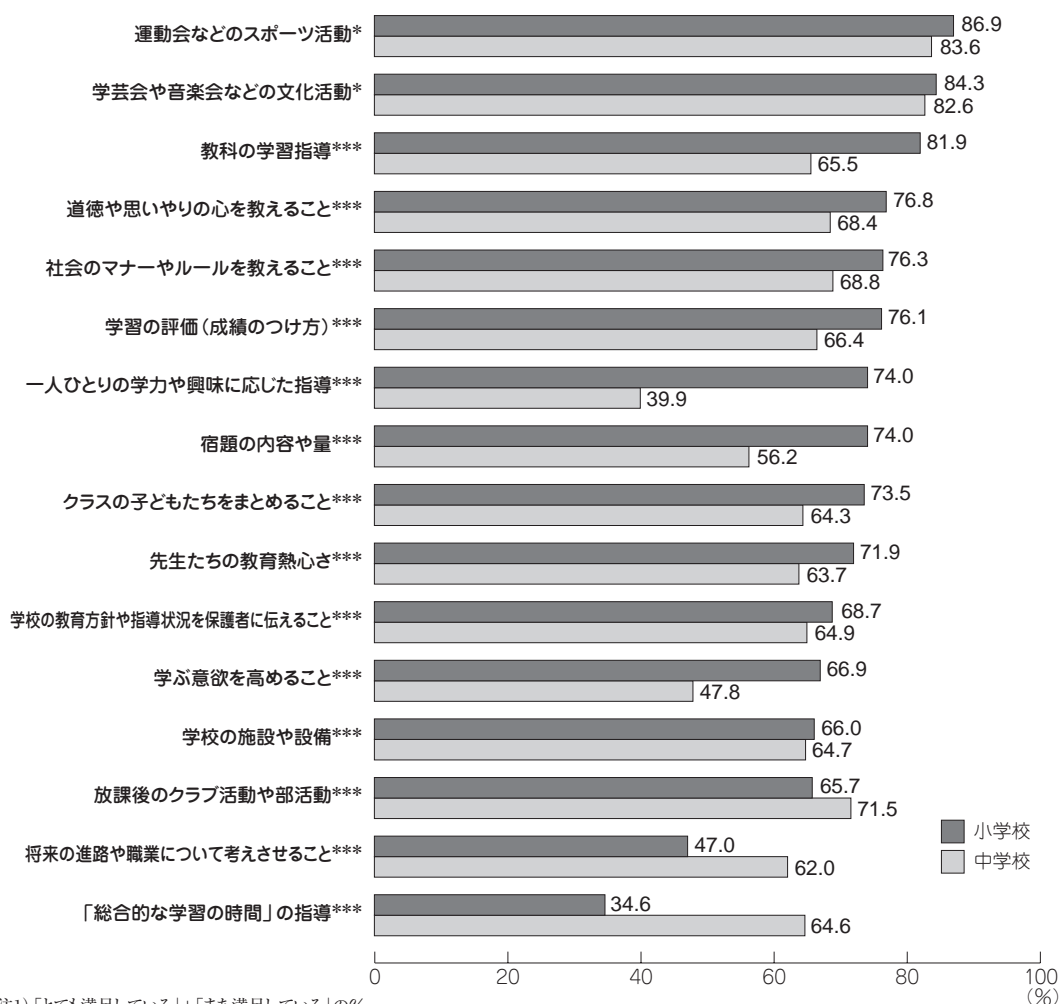
うえでみたように、中学校の保護者は、小学校の保護者と比較して相対的に満足度が低い傾向にあるが、「とても満足している」「まあ満足している」の合計比率が60%を下回る項目は「一人ひとりの学力や興味に応じた指導」「宿題の内容

や量」「学ぶ意欲を高めること」の3項目のみである。項目数は少ないが、いずれも学力にかかわる重要な問題である。とくに「一人ひとりの学力や興味に応じた指導」は40%程度と、きわめて低くなっている。中学校段階になると生徒の学力や興味も多様化するため、その対応は困難だと考えられるが、何らかの方策が必要である。

### 3.2 因子分析による満足度のパターン

期待と同様にして、満足度についての因子分析をおこなった。ここでは、「学校の施設や設

図1-4 学校に対する保護者の満足度



注1) 「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

注2) \*p.<0.5 \*\*p.<0.1 \*\*\*p.<0.01

備」と『総合的な学習の時間』の指導』の満足度を除外してある。小学校の保護者を対象とした因子分析の結果を表1-2に、中学校の保護者の因子分析の結果を表1-3に示した。どちらにも2種類の因子分析の結果が示されている。分析にすべての変数をもちいた結果と、いくつかの変数を除いた結果である。小学校でも中学校でも、すべての変数をもちいた分析結果よりも、いくつかの変数を除いた結果のほうが因子

分析として「よい」結果になっているが、除外した変数は中学校と小学校では異なる。また、期待の場合は、小学校で4因子、中学校で3因子が抽出されたのに対して、満足度については、どちらも2つの因子が抽出されている。ここでは「よい」結果について、図1-4の結果もふまえながら、順にみていくことにしよう。

小学校の第1因子は、「教科の学習指導」など8つの項目と関連しており、「学習」にかかわる

表1-2 満足度の因子分析（小学校）

	小学校 1		小学校 2	
	1	2	1	2
教科の学習指導	0.781	0.158	0.794	0.132
宿題の内容や量	0.663	0.101	0.673	0.081
一人ひとりの学力や興味に応じた指導	0.794	0.191	0.800	0.144
学習の評価（成績のつけ方）	0.631	0.279	0.652	0.269
学ぶ意欲を高めること	0.758	0.274	0.772	0.239
学芸会や音楽会などの文化活動	0.166	0.842	0.208	0.891
運動会などのスポーツ活動	0.165	0.864	0.221	0.885
道徳や思いやりの心を教えること	0.589	0.517		
社会のマナーやルールを教えること	0.584	0.512		
将来の進路や職業について考えさせること	0.580	0.389		
放課後のクラブ活動や部活動	0.298	0.556		
先生たちの教育熱心さ	0.737	0.306	0.756	0.264
クラスの子どもたちをまとめること	0.739	0.255	0.741	0.222
学校の教育方針や指導状況を保護者に伝えること	0.739	0.356	0.662	0.320
因子寄与	7.063	1.242	5.185	1.184
因子寄与率（%）	50.453	8.875	51.852	11.840

注) 因子抽出法：主成分法 回転法：Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

表1-3 満足度の因子分析（中学校）

	中学校 1		中学校 2	
	1	2	1	2
教科の学習指導	0.749	0.284	0.754	0.283
宿題の内容や量	0.735	0.050	0.749	0.069
一人ひとりの学力や興味に応じた指導	0.784	0.245	0.787	0.248
学習の評価（成績のつけ方）	0.657	0.241	0.670	0.246
学ぶ意欲を高めること	0.722	0.354	0.729	0.357
学芸会や音楽会などの文化活動	0.108	0.786	0.124	0.802
運動会などのスポーツ活動	0.100	0.806	0.113	0.817
道徳や思いやりの心を教えること	0.380	0.673	0.382	0.686
社会のマナーやルールを教えること	0.386	0.657	0.381	0.662
将来の進路や職業について考えさせること	0.478	0.564	0.480	0.567
放課後のクラブ活動や部活動	0.220	0.617	0.227	0.614
先生たちの教育熱心さ	0.545	0.563		
クラスの子どもたちをまとめること	0.500	0.528		
学校の教育方針や指導状況を保護者に伝えること	0.514	0.499		
因子寄与	6.809	1.284	5.295	1.288
因子寄与率（%）	48.638	9.170	48.135	11.707

注) 因子抽出法：主成分法 回転法：Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法



満足度といえる。第2因子は「学芸会や音楽会などの文化活動」と「運動会などのスポーツ活動」と強い関係があり、「行事」にかかわる満足度である。「道徳や思いやりの心を教えること」「社会のマナーやルールを教えること」は、ほとんどの保護者が満足しているために、満足度の特徴にはならないようである。

中学校の第1因子は「教科の学習指導」など5つの項目と関連し、小学校と同様に「学習」にかかわる満足度である。ただし、小学校と異なって、「先生たちの教育熱心さ」「クラスの子もたちをまとめること」「学校の教育方針や指導状況を保護者に伝えること」の3項目は、とくに「学習」の満足度と関連するわけではない。これらの項目は、小学校では学習活動に大きな影響を与えるが、中学校では、それほど影響がないのかもしれない。

中学校の第2因子も小学校とは異なっていて、行事だけでなく、「道徳や思いやりの心を教えること」「社会のマナーやルールを教えること」「将来の進路や職業について考えさせること」「放課後のクラブ活動や部活動」とも関連している。学校に対する期待の「生きる力」にやや近い因

子であり、「(経験の)多様性」に対する満足度であるとみることができるだろう。

これらの因子をもちいて、保護者の満足度のパターンをみておきたい。期待と同様に、平均よりも高ければ「満足度大」、低ければ「満足度小」として、パターンを作成し、図1-5に示した。

小学校の保護者では、「満足度大」であるのが「行事」のみが最も多く、それに次いで「学習」のみ>どちらも「満足度小」>どちらも「満足度大」となっている。「学習」「行事」のどちらも満足度が平均よりも高い保護者は2割に満たない。

項目別にみた図1-4からは、小学校と比較して、中学校の保護者の満足度のほうが低い傾向が示唆された。けれども、2つの満足因子をもちいた図1-6からは、異なる結果が示唆される。「学習」「(体験の)多様性」とともに「満足度大」である保護者が最も多く、次いで、「学習」のみ>どちらも「満足度小」>「多様性」のみ、となる。中学校の保護者は、1つ1つの点については満足しにくいのが、満足している場合は全般的に満足度が高くなるようである。

図1-5 小学校の保護者の満足度パターン

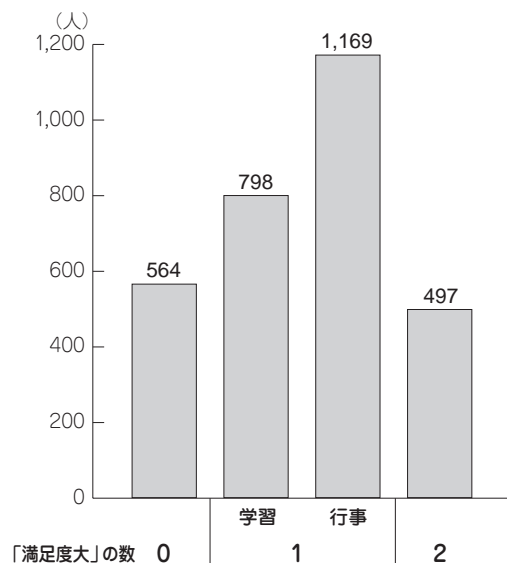
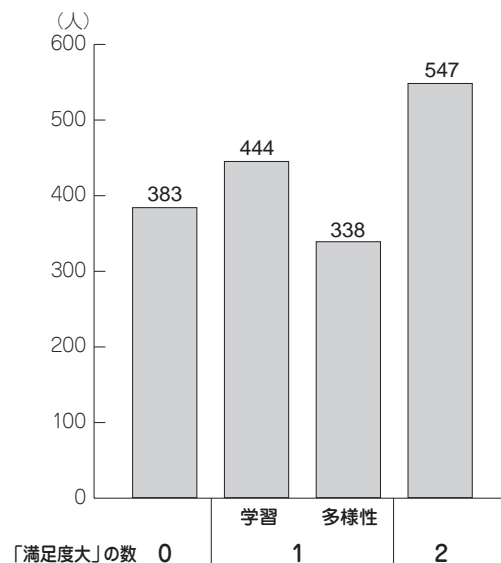


図1-6 中学校の保護者の満足度パターン



## 4 期待と満足度との関係

本節では、保護者の学校に対する期待と満足度との関係を見る。期待と満足度との関係には、2通りを考えることができる。1つは、期待しているほど満足度が高くなるという関係である。期待しているから、学校や子どもについての情報を収集することから、満足度が高まると考えることができる。もう1つは、逆に、期待しているほど満足度が低くなるという関係である。期待が大きいだけに、まあまあ程度の結果では満足できないという関係である。どちらの関係がみられるのだろうか。図1-7には小学校の保護者、図1-8には中学校の保護者について示した。順にみていこう。

小学校では4つの期待因子と2つの満足因子があった。図1-7では、期待因子ごとに、2つの満足因子の「満足度大」である比率が、期待の大小によってどのように異なるかを示している。「生きる力」の期待は、「学習」の満足とは無関係である一方、「行事」満足とかかわっており、「期待大」であるほうが「行事」の満足度が高い。同様に、「社会性」の期待は「学習」満足と、「準・学力」の期待は「学習」満足と、「学力」期待は「行事」満足とかかわり、期待が大きいほど満足も大きい。

一方、「生きる力」の期待と「学習」満足、「社会性」の期待と「行事」満足、「準・学力」の期待と「行事」満足、「学力」の期待と「学習」満足との間には、有意な関連性は認められない。

同様に、図1-8では中学校の3つの期待因子と2つの満足因子との関係を示している。全体的な傾向としては、中学校の保護者でも、「期待大」であるほど「満足度大」になるといえるだろう。「生きる力」の期待は「学習」「(体験の)多様性」とともに満足度を高める。「社会性」の期待も同様である。「学力」の期待はやや異なり、「多様性」の満足度のみと関連している。「学力」の期待が「学習」の満足と関係しない点が、中

学校の問題であるのかもしれない。

分析の結果、期待と満足との関係は、本節の冒頭でみた第一の関係、すなわち期待するほど満足度が高くなる傾向にあることがわかった。学校教育に対する満足度を高めるためには、まず期待させることが必要であることが示唆される。

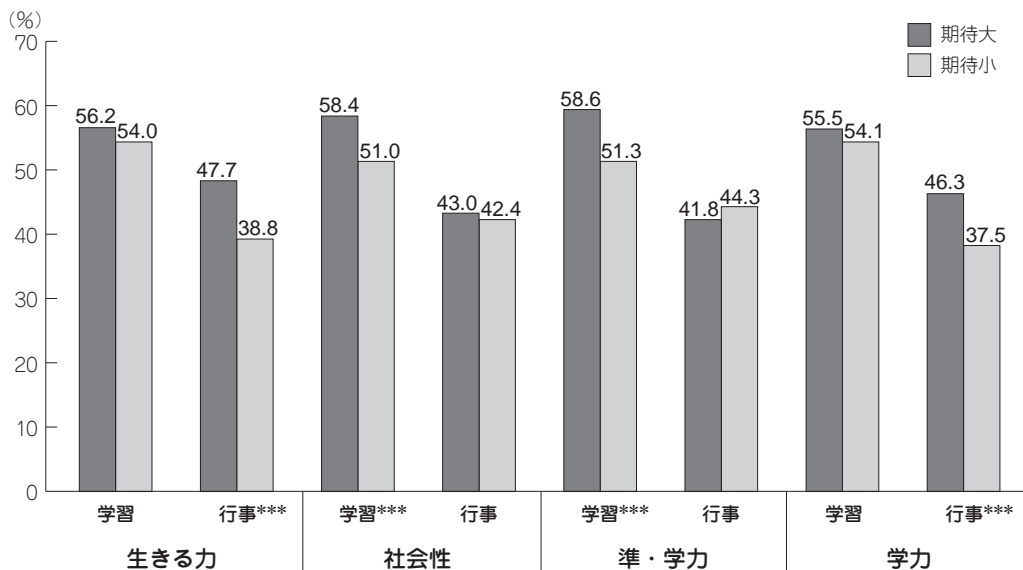
## 5 まとめ

以上、学校教育に対する保護者の期待と満足について、小学校と中学校の学校段階別に分析をおこなってきた。その結果をまとめておくことにしたい。

当然のことながら、小学校と中学校とでは教育に対する保護者の期待は異なる。因子分析をおこなったところ、小学校では「生きる力」「社会性」「準・学力」「学力」の4つの期待因子が、中学校では「生きる力」「社会性」「学力」の3つの期待因子が抽出された。小学校で「学力」とは独立の因子として抽出された「準・学力」は、「受験に役立つ学力」「コンピュータ」「実践的な英語」と強く関連している。つまり、中学校では「受験に役立つ学力」が「学力」へ、「コンピュータ」と「実践的な英語」は「生きる力」へと統合されている。小学校の保護者は基礎的な学力と受験学力とを明確に区別して認識しているが、中学校の保護者にとっては区別されていないことがわかる。

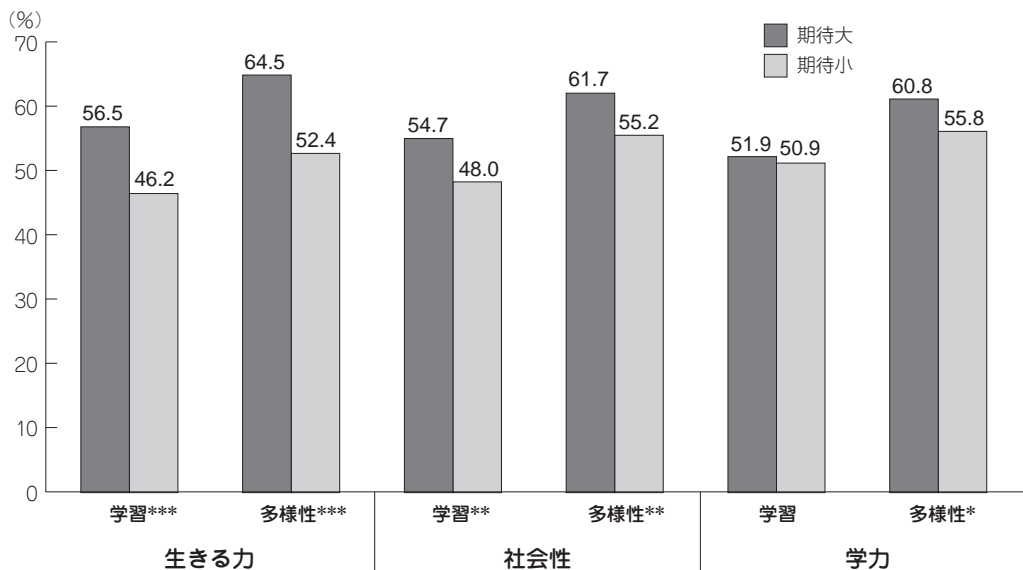
期待のパターンをみると、小学校では4つの因子すべてについて「期待大」である保護者が最も多く、2つまたは3つの因子について「期待大」である保護者が過半数を占めている。それに対して、中学校では3つの因子すべてに「期待大」である保護者は小学校よりも少なく、どれか1つの因子にピンポイントで期待している保護者も少なくない。小学校と比較すると、中学校の保護者は焦点を絞って期待しているとみることができる。こうした期待のありかたは、保護者の属性からは説明できず、それ以外の要

図1-7 小学校の保護者の期待と満足



注)\*\*\*p.<0.01

図1-8 中学校の保護者の期待と満足



注)\*p.<0.5 \*\*p.<0.1 \*\*\*p.<0.01

因が重要であると考えられる。そのため、保護者の期待を知るためには、個々の保護者の声に耳を傾ける必要があるだろう。

一方、満足度についてみると、全体として、中学校の保護者のほうが小学校の保護者よりも満足度が低い傾向がみられる。とくに学力にか

かわる点で満足度が低い点は問題であろう。ただし、因子分析をもちいた分析からは、「行事」のみの満足度が高い保護者が多い小学校に対して、「学習」「(体験の)多様性」のどちらに対しても満足度の高い保護者が多いことが明らかにされた。

さらに、期待と満足度との関係をみた第4節では、期待が大きい保護者ほど満足度が高くなる傾向が明らかになった。保護者の満足度を高めるためには、期待してもらうことが最初の条件であるといえる。

#### <注>

- (1) 保護者のニーズを重視するからといって、それが「お客様（保護者）は神様」を意味するものではないことは、もちろんである。広田・角（2008）が指摘しているように、現在の「モンスターペアレント」問題の背景には、教員を「単なるサービス労働者」としてとらえる社会的なまなざしがある。学校教育を教員と保護者の「協働の場」とするためには、学校側が保護者のニーズを重視すると同時に、教員の職務の自律性や専門的判断の根拠を明確にすることの双方が必要であろう。
- (2) 父親の学歴のみが、やや有意な関係があり、父親が大卒であると「期待大」の数が増加する傾向がみられた。

#### <参考文献>

- 広田照幸・角能、2008、「『モンスター・ペアレント』問題をどうみるべきか」『教育と文化50号』30-38。  
黒崎勲、1994、『学校選択と学校参加——アメリカ教育改革の実験に学ぶ』東京大学出版会。  
小野田正利、2006、『悲鳴をあげる学校』旬報社。  
——、2007、「追い詰める親、追い詰められる学校」『中央公論』2007年12月号、32-39。  
嶋崎政男、2008、『学校崩壊と理不尽クレーム』集英社（集英社新書）。  
山下絢・岡田聡志、2007、「学校教育に対する保護者意識の実態——ターゲット・プロファイリングによる『学校教育に対する保護者の意識調査』の二次分析」、第7回SPSS研究奨励賞・応募論文。  
(<http://www.spss.co.jp/ronbun/archives/2007/index.html>)